

六十年目に初めて抑留記を

新潟県 植木茂男

入隊く抑留く復員

戦後六十年といわれているが、私にとつてこの六十年の原点はソ連による強制抑留しか考えられない。六十年という歳月は記憶が薄れゆくばかりだが、忘れようとしても忘れることができない部分も存在する。

昭和十九（一九四四）年八月十五日、陸軍特別幹部候補生として私は浜松の中部第九十七部隊に入隊した。一年後のこの日終戦の日を迎えるとは想像もしなかった。繰上げ徴兵検査も済み入隊待ち、志願した海軍航空隊は三重の香良州に入隊が決まっていたが、私は特幹を選んだ。第一志望は操縦だったので一期の検閲が終わると、立川の陸軍航空学校へ適正試験にでかけた。すべての検査に合格したが最後の最後の軍医の総合判定で

僅かの乱視を理由に操縦不適の烙印を押され「死に急ぐことはあるまい、他の部署で奉公しろ」と言われた。悔し涙で退出しようとしたとき「おい、植木、ヤソ教は何教か知ってるか、俺は貴様の先輩だ、A学院だよ」何の意味かこの一言には驚いた。

浜松に帰隊後外泊許可が出て新潟県高田市（現在の上越市）の生家へ帰った。十九歳の晩秋である。我が家からは朝に夕べに眺めることができた妙高山、火打山、南葉山も迎えてくれた。これらの山々は母校南本町小学校の教室からも見え校歌の一番に出てくる。「あしたの窓に仰ぎ見る、妙高火打南葉山、山それぞれに異なれど、同じく空に聳えたつ」。外泊時、長兄は召集を受け妻と二歳の男子を残し東京の高射砲部隊に、次兄は朝鮮の羅南からフィリピンへ、三男であるすぐ上の兄は久留米の予備士官学校の教官、そして四男である私は兄たちに続いた。八人兄弟で男六人のうち四人が軍隊へ、すぐ下の弟は学徒動員で北海道へ、一

番下の弟はまだ小学生だった。

両親、ことに母の胸中を思うと辛かった。故郷の山々、家族には二度と会うことはないとい心の中で思った。小学校時代の友人達のほとんどが軍籍にあり会うこともできなかった。すぐ近くを子供このころ水泳に明け暮れた矢代川が流れ、堤防沿いに氏神を祭る神社がありお参りをし、境内の井戸水を五臓六腑に染みるほど飲んで高田を後にした。

外泊から浜松の部隊へ帰隊して間もなく、第八中隊人事係准尉から満州独立飛行第八十一中隊への転属命令を達せられた。班長だった吉田伍長に引率された八人は真冬の玄界灘を体験したこともない船酔いに苦しめられながら昭和二十年一月十七日釜山に上陸した。昭和二十年一月二十四日鮮満国境を通過、奉天省鞍山の部隊に到着し、飛行服をまとい色白で凜々しい姿の若い大和田隊長に申告を行った。当時すでにB 29が満州上空に飛来しこの部隊はそれを迎撃する戦闘部隊であった。

飛行場には隼戦闘機が数機待機していた。ある日

たしか三人の特攻隊員を送ったことがある。白いマフラーを巻き隊長から訓示を受け杯を飲み干した後、隊員が手を振り見送りする上を旋回しながら澄み切った厳寒の高空のあなたに消えていった。後日この隊員達は九州の基地から飛び立ち沖縄において敵艦に体当たりを敢行し戦果を挙げたことが伝えられた。

我々はここでは、見習い士官による短期間に一般的な教育を受ける程度で、三月下旬ハルビンから列車で一時間ほどのところの拉林の航空教育隊へ派遣された。私は機上整備を命じられたが飛べる飛行機は一機もなく、南方戦線や中支戦線で数々の爆撃行で戦歴のある一〇〇式重爆こと呑竜が教材だった。機首に搭乗し望遠鏡をのぞきながら配電盤を操作し爆弾を落下するのだが、弾倉には缶詰の空き缶に土を詰めた代用爆弾が吊してあり落下させるのである。規模が中程度の飛行場と格納庫が一棟だか二棟があった。ここでの教育隊長は三浦といったが人間味をもって特幹に接し

れた。講話では東京の大空襲のこと、サイパン玉砕、沖繩戦について聞かされた。教育隊から一キロほどの所に小高い山があり、麓には近くに住む住民の墓が点在していた。学科や整備の実地訓練を除いて、野外での戦闘訓練はすべてここで休みなく実施された。

周囲の平原がうつすらと黄緑色になるころ、住民の春耕が始まった。休日は農家の入り口で何回か様々な会話をすることもあったが、我々の中国語より彼らははるかに日本語を知っており上手だった。みんな素朴人間に思えた。やがて周囲の畑一帯の玉蜀黍、粟、稗、高粱などが背丈ほど育ち、大豆もたわわに実をつけ、あたり一帯の景色はいかにものどかそのものだった。

昭和二十年八月九日早朝、起床ラッパが鳴るにはまだ時間があった。突然飛行機の爆音が聞こえた。戦闘機か偵察機だかは不明だが単機で銃撃するような音もなくどこかへか飛び去った。後刻ソ連機であることが伝えられ、やがて全隊員が集合

する前で三浦隊長から「ただ今をもってこの教育隊は解散する。既にソ連軍は国境を越え進攻しつつあり、各人は直ちに原隊へ復帰すべし」と命令が発せられた。我々の原隊はすでに鞍山から新京（長春）へ移動していた。雑嚢には十分にあてがわれた食糧を詰め、三八式歩兵銃と共に拉林駅へ向かった。ハルビンまでは列車は順調に動いた。ハルビン駅は北からを始めとする避難民でごったがえしていた。ホームから線路を見るとゴミ屑がいっぱい散らばっている。そんな中に生まれたばかりの赤ん坊の裸の遺体があった。というより捨てられていた。これから続く混乱の中で初めて目にした瞬間であり六十年後の今でも脳裏から離れない。幸い発車時間は不明だが新京方面行きの列車に乗り込むことができたが車内は女や子供でいっぱいだった。避難民からは兵隊さんはデッキにいて見張りをして下さいとの要望があり三八銃を持ち二人ずつ交替でデッキに立った。

列車は動いても前をいく列車の関係か止まって

は走るの繰り返しで新京へはいつ着くやらの状態であった。幸い満人が列車を襲うことがなかったが夜は不気味でトウモロコシやコウリヤン畑から銃声が聞こえたが心配はなかった。日本軍の施設らしき建物からは火災による煙が点々としていた。

昭和二十年八月十七日 ハルビンから一週間もかかって新京へ着いた。この日は中部防衛司令部へ向かう。ここで、八月十五日天皇陛下の放送があり日本の敗戦を初めて知った。

八月十九日 中部防衛司令部発新京西飛行場の原隊独立飛行第八十一中隊(満州第九一六二部隊)へ到着。大和田隊長に原隊復帰の申告を行った。このとき以来私は二度とこの隊長に会うことはなかった。

八月二十日 原隊を出発、他の隊員とともに徒歩で新京駅へ、この日は車両内で一泊。

八月二十一日 新京郊外蒙家屯馬部隊着。ここで連日使役が始まる。

八月二十四日 武装解除。銃剣等すべて一カ所

に投げ捨てるようにして積まれた。近くの倉庫には慰問袋が山と積まれており、どの慰問袋にも千人針が、まれに万年筆や腕時計などの貴重品が納められていた。

九月一日 新京南嶺の工業大学に收容される。

このときに千人ぐらいの新たな部隊が編成されたように思う。連日日本軍隊の所有物一切を貨車への積み込み使役だった。カマスに詰められた干しニシンは後日コルホーズの收容所でお粥の中に入れてきた。

九月十日 新京駅発く九月十八日黒河駅着。九

月二十三日 黒竜江渡河。

九月二十三日 (入ソ) ブラゴエシチェンスク上陸。

九月二十八日 我々は貨車に詰めこめられた。

たしか二段だったと思うが。このとき同じ部隊の仲間とはかなり分散されてしまったが、そこにはまた新たな仲間が発生した。抑留者に乗せた大きく長い長い貨物列車はバイカル湖沿線に出たとき、

初めてただならぬ気配を感じた。すでに日本の抑留者が西へ送られていることは明白だった。列車が止まるたびに、黒パンや羊だかの腸詰などを持ったロスケのマダム達が寄ってきて物との交換が始まるのだった。時計、ハンカチ、万年筆等何でもよかった。食事は二回、時間は不規則、もう記憶は薄らいだが着衣一切を高熱処理により虱の駆除が行われ、抑留者は洗面器一杯か二杯の湯で体を拭く程度の入浴が行われたがこの駅だったか今は分からない。いっこへ連れて行かれることやら。貨車の中では静かに寝ているよりしようがない。貨車はノボシビルスクより南下した。

十月二十日 私たちを乗せた貨車はブラゴエから二十三日目にウズベック共和国タシュケント州ベグワド町のシルコア駅に到着下車。私のメモではこの日は河原で宿泊と書いてある。長い旅疲れで多くの仲間は生気がなくなっていた事は確かだ。

十月二十三日 第四ラーゲルに収容、ソ連へ来て収容所生活のいわば始まりである。

日本人通訳によりソ連の収容所長の注意事項が達せられた中で、抑留者一人の脱走が伝えられた。労働現場へ向かう抑留者が衛兵所を出る時の人数確認が手間どった。五列縦隊に並ばされ、アジン（ひとつ）、ドワー（ふたつ）、ツリー（みつつ）と、くわえ煙草をポイ捨てまでして声を発しながら数えていく日直将校の姿は滑稽でもあった。

私はこの第四ラーゲルでは四十日余を送ることになる。分担した労働は工場での穴掘りとバラス運びだった。現場へは昼食が専用トラックで運ばれてきたが黒パン一切れとぬるま湯のようなスープだけだった。ここでは浜松以来の仲間は八人中、宇都宮出身の直井甲子郎と斎藤皎と私の三人だけとなったが斎藤とは労働が一緒だった。昼食時や休憩時も会話は途切れることはなかった。不思議と気が合った。遠くはるか万年雪をまとった天山山脈が望めた。私は入隊前は東京にいたこともあって関東の山々を歩いた。斎藤も宇都宮辺の山に出かけたという。天山の山脈を望みながら互いの

生い立ちから入隊までの一切を語り合うことがしばしばだった。彼には既に両親が承知の許婚があることも打ち明けた。十一月三日の明治節には日本の隊長の号令で日本に向かい最敬礼を行った。

自分が今生きていることが届くことを願った。

ある日、抑留者全員の前に首をうな垂れた脱走兵が立っていた。脱走中住民一人を殺害したことが報告された。後日この脱走兵は銃殺されたことを聞かされた。

ある時、抑留者が医務室で全裸にされ、ソ連の女性軍医による身体検査をうけた。診断の最後はお尻の筋肉を摘むのであった。私はソ連にきてから痩せてしまっていた。軍医は私に「ラボータ・ニ・ハラシヨ（労働は無理）」と言った。立会いの日本の軍医によればO・K（オーカ）グループに入れるとのことである。

十一月二十五日、私は発熱三八〇度で五日間も続いた。マラリヤとのことだったがラボータは休めた。熱患者は文句なしに休息が与えられた。

再びラボータに出たと思ったら斎藤が熱を出し彼は医務室に隔離された。直井と見舞いに行った時は顔を真っ赤にしていた。「早く、うちへ、帰りたい」と彼は言った。「みんな一緒に帰ろう」と元気づけた。明日また来るからと退去したがこの時が最後となった。

昭和二十年十二月五日午後五時十三分逝去、病名は急性肺炎で私より一つ少ない十九歳だった。軍医にお願いし彼の小指の一部を切り取ってもらった。彼と同郷の直井に持ち帰りを頼み、どちらか先に日本へ帰ったらこの事実を両親に伝えることにしようとの約束をした。後年舞鶴で私が先に帰国したことが分かり係官にこのことを報告した。

昭和二十一年一月五日 年が明けて間もないこの日、五十〜六十人ぐらいがシルコア駅へ、初めての移動だったが列車は客車だった。O・Kの宣告を受けた者ばかりだった。

一月九日 アンジシャン駅着チャマ療養所へ入所。あちこちからの尻が皮ばかりの抑留者の寄せ

集めの場所のようで百人ぐらいたったろうか。ベッドは二段ではなく大部屋の病室のようで、食事は個人ごとの飯盒に配られた。昼食には時折白パンと野菜のスープの他、副食に魚(バイカル湖でとれたという鮒に似た魚)の塩漬けや、漬け物(キヤベツの酸っぱく漬けたもの)がっていた。周囲の畑には積み上げられた綿花の山が点々としている。療養所でのラポータは綿花の摘み取りと二人一組となつての綿からの糸作りだった。糸より機を回転させながらラツパ状の口へ綿を入れるのだが、ノルマに追い立てられることはなかったが今となつては幻のようだ。

ここでは抑留者同士の結束のようなものが生じた。お互い明日の運命が分からないなか、せめて住所だけでもと交換記録をした。私はマホルカ(たばこ)の巻紙に鉛筆で住所を書いてもらったが、この小さな住所録は無事日本へ持ち帰った。

療養所では就寝前のひとときを寝たままではあったが、お互いの故郷をしのぐのでの話や歌などを

交換することもあった。

三月十七日 再び次のラーゲルへの移動がやってきた。アンジシャン駅へ。

三月十九日 ベグワドシルコア駅着第三ラーゲルに収容される。

ここでのラポーターは一番きつかった。麻袋に土を詰めて長い斜面を運ぶのだった。土の量を少なくすると、監督が文句をつけるし、のろのろ歩きでも叱るし、たまつたものではない。復員して腰痛に悩んだのはこのときが原因だつたと思つている。第一だか第三ラーゲルだか有刺鉄線をはさんでドイツ人の捕虜と会話ができた。ドイツ人がいた所は収容所ではなくロシア軍人の集会所で夜になると音楽が聞こえドイツ捕虜の演奏により、ロスケがダンスをしているのがよく見えた。ダニユウ川のさざ波や金と銀の曲が流れてきた。ある時ドイツ捕虜の話によれば小高い丘を指さして亡くなった仲間がムノーゴ(沢山)埋められている、と教えてくれた。

第三ラーゲルでの労働は発電所建設のための麻袋による土の運搬だったがこの他にアングルの運搬などもやった。私たちが療養所にいたころ第三ラーゲルでは亡くなった抑留者がたくさんおられたことを聞いた。やはり冬の寒さはこたえる。こゝに交替勤務の夜中から明け方までの労働には苦勞した。零下二〇度になると待機を知らせる鐘が鳴った。たまに板に乗せられた遺体が抑留者の僧侶の読経と一緒に墓地へ向かうのを見た時は両手を合わせ黙礼するしかなかった。ある時はラボータの途中、誰からともなく一斉にただ立ち止まったことがあった。

言ってみれば、つかの間の労働ストのようなものだった。原っぱでしゃがみこんで長い長い用足しをしたが、同じ寒さでもラボータでの用足しは我慢ができた。体力の消耗を防げたからだ。

土間で藁ぶとんと毛布二枚で寝なければならぬということもあったが、寒くて我慢できず二人一組となり、合わせて四枚の毛布の中で寝たが夜中のト

イレへ行くのに一苦勞だった。女性軍医による身体検査では私は相変わらずO・Kだった。骨と皮だけの栄養失調同様で腹は膨らんでいた。この段階ではまだ自分の死を考えたことはなかった。私は苦しい時はいつも第四ラーゲルで亡くなった斎藤君のことを思った。「斎藤、俺は日本へ生きて帰る、君のお父さんやお母さんに報告するまでは死ねないよ」。直井君もどこのラーゲルで同じことを考えているだろうと思った。

四月十九日 再びダワイ、ダワイの声に追いつてられトラックにいっぱいの抑留者が乗せられた。どこへ連れて行くのだろうか。しかしほとんどがO・Kと診断された者ばかりであり、アンジヤンの仲間の顔ぶれが多かった。トラックで揺られること二時間ベグワド郊外のコルホーズ収容所に着いた。私のメモでは第六コルホーズ収容所である。栄養失調ではトラック輸送がこたえる。腸がちぎれるような振動がこわいのだ。抑留者は百人ぐらいだったと思う。規模の小さい収容所であつ

た。私は抑留期間中で最も長い半年余をここで送ることになる。コルホーズの農場の見取図を書いてみた。ここでの抑留者の年齢の構成をみると我々のように二十歳前後と、あとは現地召集の四十代の方達で、中間の三十代はかつての下士官クラスで少なかった。収容所には確か電灯がなかった。多くの仲間は鳥目になった。夜盲症である。

ラポータにはマンドリン銃を肩にしたカンボーイが一人付くだけで、農場へ着くと独特のカラフルな丸い帽子をかぶり、顔色は日焼して、厚手の綿入れの長いコートを着たウズベク人の監督（カマンジール）が待つており、すべては彼の指示で作業をするが抑留者を本気で怒ることはなかった。コルホーズへは時間にしてゆつくり歩きで二十分ぐらいだった。一番始めの作業はカルトーチカ（じゃがいも）の植えつけで、既にトラクターにより畝ができていた。長さ百五十メートルぐらいで幅の広い畝に二人一組となり、一人が鋤で穴をあけ待つてるところへもう一人が袋から小さい

種芋をポイと投げこみ鋤で土をかぶせて進む。

ポミドール（トマト）は幅三メートル長さ百五十メートルの畝と畝の間に用水から引いた水が流れている、その流れに添ってひよろひよろの長さ二十センチぐらいの苗を田植えでもするように差し込んでいく。我々は「こんなもの実るまでこんなとこにいられるか」と言ったものだった。玉葱、人参、胡瓜、西瓜、メロン等々の作業や草取り等々作業は続く。昼はラーゲルへ食事と昼寝に戻る。まだ陽が高い二時になると集合の鐘が鳴り農場へ向かう。水の枯れた用水を掘ると、たくさんのお亀が出てきた。炊事場の竈で焼いて食べると結構いけた。蛙や蛇も食べた。畑の草にアカザがいっぱいあり腹を満たしてくれた。ある日、広い農場に抑留者が散らばるように作業をしている時のことである。いつも抑留者に混ざってウズベックの女性も仕事をしている。そんな中の年配女性に近寄っていく、銃を持たない一人のソルダト（兵隊）がおった。抑留者達はじつと立ったままこの成り

行きを眺めた。兵が何かを叫んだときその女性は走り寄って彼に抱きついた。そして泣き出した。ウクライナ戦線からの復員兵が母に会いに来たのだった。何やら複雑な思いをしたのは皆同じだったと思う。バザールのある日はラクダの隊商が近くを行く。歌声も聞こえてくる。

六月二日〜十二日 ついに自分にも腹痛がやってきた。トイレへ行くときちよっぴり便が出る、その後に粘液が出る。帰ってきて横になるとまたトイレに行きたくなる。こんなことの繰り返しで日に二十回以上続く。粘血便になったときはこれ以上悪化しないよう祈った。日本の軍医は死に至ることはないと言気づけてくれた。トイレは板を丸くくりぬいたところへ用を足すが、二十ぐらいの穴があり仕切りはない。アメーバ赤痢は十日間で治まりラポータに復帰した。農場の一角に高さ五十センチ、一辺が二・五メートルほどに土盛りをしたところがある。農民がそこに座り太陽に向かい何やらを唱えながらお辞儀を繰り返している。

作物が無事育つよう太陽に祈っているとのことだ。やがて、猛暑の季節がやってきた。日中は四〇度にもなりスズメがぱたと落ちる。ラーゲルでの昼寝は軒下や縁側で休んだ。

病人も出た。日本の軍医は熊本出身の大道大尉だった。医務室はいつも満員で、マラリヤのほかアメーバ赤痢患者が圧倒的だった。農場では余りの暑さに耐えかね、神奈川の橋本出身の島田小太郎さんと二人で少しばかり離れた幅五メートルほどの川で泳がせてくれと警戒兵に申し出た。彼はOKし川まで付いて来て、我々の全裸でふりちらの泳ぎを監視した。この間十五分ぐらいだったろうか。彼にはスパシーボ（ありがとう）を繰り返した。やがて次から次へと作物の収穫期となったがトマトは青いものは漬け物として倉庫のコンクリートで囲った穴へ運び、赤く熟れたトマトは横からナイフをいれ皮を三センチほど残し横に開き前記の土盛りした上に並べ塩をまく。丸一日もすると乾燥トマトが出来上がる。人の良い監督

は農場ではいくら食べてもよいがラーゲルへは絶対に持ち帰らぬよう言うが、我々は残留者のために分担して持ち帰った。乾燥トマトもキャベツやトマトの漬け物は同じ日本の抑留者の口に入ることを聞かされていたので感慨ひとしおの思いだった。トマトは香りがなくなただ甘いばかりだった。

スイカは一時的に水腹となった。大きさがラグビーボールのような形をしてもっと大きめなウズベクメロンの味は最高だったし、監督は慎重に扱うよう注意した。栄養失調同様の体には食べすぎは禁物であった。ある日ラボータが帰ったら、島田小太郎さんの置き手紙があった。彼は発熱で医務室にいたが中央病院送りとなった。「会いたる者いつか別れんとは宇宙の法則とかいう、我らその期の余りにも短かかりしを嘆き、ウズベクメロンの味親しまざりしを遺憾とす。日本での再会を祈る。」と置き手紙を私あてに残していった。私はラボータと並行して三カ月ほど日直勤務もさせられたが一日のラボータが終わり帰るときカンボーイ

がヤポンスキー軍歌ハラショー歌えと言う。佐渡おけさをやったり、雀の学校をやった、その後はいつもチイチイパッパをやれというものには参った。十二月一日 コルホーズ収容所にさらばする日がやって来た。カンボーイは「ヤポンスキーソルダト東京ダモイオーチンハラヨー」（日本兵は帰国できるぞよかつたな）と言っている。我々は「ニエト、ニエト」（違う、違う）とやりかえす。

このカンボーイの生活を見てきたが、丸い飯盒に切った馬鈴薯を入れ、更に人參や玉葱を加え羊の肉を入れ、煮立ったら塩を入れとろとろにして食べる。朝食は黒パンとスープだけだった。靴下は使わず布を足に巻きつけていた。洗面は口に含んだ水を手の平に移し、顔を一く二回こすって終わる。コルホーズ収容所では羊の肉が入ったカーシャ（お粥）がよく出た。癖がなく柔らかく比較的受けたと思う。

住民の交通手段はロバで大人も子供も利用していたが一度だけ監督のロバにまたがった。

ダワイダワイの声に追い立てられトラックに揺られながら着いたところが第一ラーゲルだった。千人近い抑留者が大きな発電所工事の労働に従事していた。我々は最初はラーゲル内のトイレの穴掘りを、次いで工事現場での水路造りだったが肉体的には大変だった。コルホーズの労働とは余りにも差があつたからだ。第一ラーゲルへ来て初めて日本新聞を目にしたが何だかじつくりと活字を追う元気もなかつたが、そのことを口に出しては言えない雰囲気だった。

昭和二十二年一月一日 私はここ第一ラーゲルで、新年を迎えた。演芸会が開催されたり、活動家の講演があつたりした。ラボータ成績のよかつた者には休暇のほか食事など特別待遇が用意され羨ましい思いもした。三月十五日私は再びアメーバ赤痢に襲われO・K班に所属した。下痢は四月五日まで二十日間も続いたが少しでも早く治つて欲しいと慎重に構えた。この時中央病院へ送られた島田小太郎さんからお金(ソ連の硬貨)が届い

た。彼は病院で炊事勤務とのことだった。私はアメーバ赤痢のあと二週間衛兵所勤務についたが、これといった仕事はなかつたがカンボーイの話し相手と掃除くらいだったが、彼が言うには「植木はスコラダモイ」と再三言つたがこれが真実だったのだ。四月二十五日移動待機組に入れられ新品の冬の外套を渡されたが外套は日本軍隊のものだった。

五月三日 午後第一ラーゲル発夜十一時シルコア 駅着車中泊

五月四日 シルコア 駅午後一時ごろ発

五月五日 端午の節句 タシユケント着 発

五月九日 アルマアタ夕着

五月十一日 滅菌処理

五月十三日 本線合流

五月十八日 バイカル湖通過

五月十九日 チタ夜着

五月二十二日 入浴

五月二十四日 ハバロフスク

五月二十七日 帰国終結地ナホトカ着 この日
第一ラーゲルに收容される。

五月二十九日 第二ラーゲルで滅菌。

ナホトカでは連日活動家による演説、民衆の旗
赤旗に始まる歌の指導、スターリンへの感謝の決
議、行進等々、さてはソ同盟への忠誠心なくば帰
国乗船はできないし現に残留者のいることなど聞
かされるに及んでは、すべて ごもつとも、ごも
つともを貫いた。ことに我々のように中央アジア
では民主化教育が始まったばかりで、満足にその
教育を受けていない者には、彼らの一層の力説を
感じとれた。

六月二日 第三ラーゲルへ。

六月三日 タドき、帰還船遠州丸に乗船。船尾
に日の丸が、タラップを上がると看護婦さんの「長
い間ご苦労さまでした。」の声にまともに顔をあげ
ることができなかった。船酔いに苦しみながら渡
った玄界灘とは違い遠州丸は波穏やかな日本海を
一路故国へ向かう。

六月五日 遠州丸は舞鶴湾に入った。緑一色に
覆われた景色が目の前にあつた。お互いにこれま
での抑留生活など語り合うことなくじつと前方を
見つめるだけである。

六月七日 東舞鶴港に上陸 当時DDTという
米国製の消毒やらを体にかけられた。在ソ中の
様々の事実を聞かれた。私にとっては何といて
も斎藤君の現地での死亡の報告があつた。彼の小
指を持ち返るはずの直井君はまだ帰国していな
かつた。

家へまず帰国したから安心たのむと打電、時間
をおいて高田へ到着予定の時間を打電した。引揚
証明書と復員証明書が別々に交付されたが証明書
を今も保存している。

あとがき

昭和二十二年六月十一日信越線高田駅に姉の出
迎えを受け家までの約四十分の道を歩いた。姉か
ら先ず父が亡くなったことを聞かされた。毎日ラ
ジオで海外からの引揚げのニュースを聞きながら

子供達の帰国を待っていたという。更に長兄がブーゲンビル島で昭和十九年七月二日戦病死したという。私が浜松に入隊したときはもう亡くなっていたのだ。その後兄嫁は次兄と再婚、曾孫に恵まれ今は幸せな日を送っている。

私は復員後抑留から解放された故か、発熱が続き四十日も寝込んだ。辛うじて持ち帰った住所録によりそれぞれ関係のあるご家族へご子息の無事を知らせた。辛かったのは斎藤君のご両親への死亡報告だった。お母さんが宇都宮から私をたずねて見えたが、このときばかりはお互いに声をあげて泣いた。昭和二十四年十二月十五日付で直井君から第四船栄豊丸で復員を知らせる手紙が届いた。斎藤君の遺骨はある事情で持ち帰れなかったことをご遺族に報告と私への詫び状であった。このときの直井君の手紙はまだ保管している。

ブーゲンビル島で果てた長兄と私とは十歳も離れている。家の都合で小学校入学前に私は遠縁へ養子に行くことになったとき、この兄は自分が幾

らでも稼ぐから弟を人にやらないでくれと両親に懇願したという。この兄とはお酒一杯も酌み交わすことはなかった。今は兄の写真の前にビールを供え乾杯している。

復員後三年目に私は地方公務員に就職した。しかし心の中は常に戦争犠牲者のことばかりでいっぱいだ。大東亜戦争では三百万人もの犠牲者があつたという。ことに、戦争が終結したというのにシベリアへ強制抑留され、それが原因で犠牲となつた方々のことを思うとやりきれない。気がついた時私は山を歩いていた。低山徘徊である。昭和十九年六月浜松へ入隊を前に私は草鞋がけで妙義山を登山し、その後親友三人で高尾山へお別れの登山をした。今も昔も山は静穏である。その静穏の中で戦争犠牲者への鎮魂を願うようになっていった。

山の自然のなかでのボランティア活動を模索しているとき、環境庁（今は省）が、国立公園を訪れる人たちを対象にサブレンジャー（現在はパー

クボランティア）活動を実施していることを知り飛びつくように参加した。自然観察とか自然解説のボランティアである。私の活動の舞台は上信越高原国立公園妙高地区である。妙高高原での活動はもう二十年になる。「水ばしょう」の解説、火打山（二四六二メートル）では高山植物やライチョウの自然解説を、笹が峰では夏の自然教室、冬はいもり池周辺で雪上観察会等々である。こうした活動の中から多くの人から自然の大切さや、平和の尊さも知って頂ければと考えている。私なりの戦争犠牲者の霊に報いる道でもある。

私より遅くシベリアから舞鶴へ復員した仲間からは手紙がたくさん届いた。六十年も経つと便りはいつの間にか自然消滅して、彼らは今どうしているだろうかとの思いも募る。しかし、抑留体験を余儀なくされた青春の「ひとこま」を共有した仲間の思いはみんな同じだと信じている。それは平和の尊さであり平和への願いである。

シベリア抑留死没者の県の慰霊祭にもお手伝い

にでかける。県内では千六百四十六人の犠牲者がおられる。九段会館の中央慰霊祭にも先輩の皆さんと一緒に出かける。

ほとんどの皆さんが八十歳代となった。生あるかぎり、私はシベリア強制抑留のことは忘れることはないだろう。

体の動ける限りパークボランティア活動は続ける覚悟でいる。ある年私はこのボランティア活動と並行してネイチャーゲームにも挑戦し資格を取得した。当時県内では、私が一人であったことから県ネイチャーゲーム協会を設立、初代理事長に就任、普及活動に務めた。今は若い人たちが後を引き継いでおり、順調に発展しつつあり感謝している。ネイチャーゲームの目的は「自然への気づき」である。五感で自然を感じ自分と自然が一体であることに気づくことである。現在百三十ほどのゲームが用意されており、子供を中心に自然のなかで楽しく展開されており、環境教育の先端を担っている。

私がこの六十年目の抑留記を書き上げたころ、本県糸魚川市能生にお住まいのソ連抑留経験者である村山常雄さんが「シベリア抑留中死亡者名簿」を作成の功勞により「吉川英治文化賞」を受賞の新聞記事を目にした。その後テレビやラジオでも放送されるなど村山さんの死亡者への思いが伝わってきた。死亡者は六万人超と聞かすがそのうち約四万五千人がこの名簿に納められているという。村山さんは抑留記以前のこととして死亡された方々の生きた証を優先された。頭がさがるばかりだ。

【執筆者の紹介】

一 生年月日 大正十三年十二月三十日、八人兄弟（男六人女二人）の四男として、高田市（今の上越市）にて出生

二 本籍地 新潟県上越市
三 現住所 新潟県新潟市

四 最終學歷

昭和四十二年三月三十日 中央
大学法学部（通信教育課程）卒業

五 職歴

昭和十四年四月～昭和十九年七月 東京渋谷三菱三青果販売株式会社勤務

六 軍歴

昭和二十四年二月～昭和五十七年三月 新潟県職員として勤務
昭和五十七年四月～昭和六十二年三月 新潟県嘱託として勤務
昭和十九年八月十五日 陸軍特別幹部候補生として浜松中部第九十七部隊に入隊

昭和二十年一月二十四日 満州独立飛行第八十一中隊に転属
昭和二十年九月十八日 ソ連抑留
黒河経由入ソ、中央アジアにて労働に従事

七 復員

昭和二十二年六月三日 ナホトカ

八 結 婚
九 その他

出港、七日舞鶴上陸、八日復員

昭和二十八年三月三十日

新潟県を退職後は余暇を環境省

パークボランティアとして現在

まで二十年余活動を続けている。

(新潟県 柴沢 正雄)

私のシベリア抑留記

愛知県 中根 昭 二

私は名峯三河富士として知らるる村積山の麓、岡崎市奥山田町で昭和二(一九二七)年二月六日に生れ、昭和十八年十二月に県立岩津農学を繰り上げ卒業し同校の助手として採用され奉職していたが、戦雲急を告げ、にわかには戦況も激しさを増す中、昭和十九年八月十五日に陸軍特別幹部候補生に志願し、浜松航空隊中部第九十七部隊に入隊する事となった。六カ月の初年兵教育を終え満州に配属命令が下った。

昭和二十年一月十二日に浜松を出発する事となった。最後の面会が許され早速実家へ連絡をとった。実家では物資の乏しい中工面して色々なものを持ってきてくれた。餅とかおはぎのたぐいは當時は貴重な存在であった。農家という事でたくさん作ってきてくれたので大好物を腹いっぱい食べ、